このまち感じよう!
ここずたうん
大野南地区を楽しく育てる情報紙
発行：NPO法人 ここずっと　2024 March
No.24

ひとと ひとの つながりの記憶が まちの風景をつくる

開館40周年記念～ポスターで振り返るホールの彩り～展示中の相模原南市民ホール（2024年3月10日撮影）

ここひと　インタビュー

▲森 多可示（もり・たかし）さん
市内緑区在住。1979 年相模原市入庁。
市民局長、副市長を歴任して 2023 年退任。

相模原市には、市民と行政が手を取り合ってまちづくりを行うための市民協働事業提案制度があります。〈ＮＰＯ法人ここずっと〉は、令和６年度からこの制度にのっとり地域包括ケア推進課と協働で「ユニバーサルデザイン普及・啓発事業」に取り組むことになりました。

ユニバーサルデザイン（以降ＵＤと表記）については、〈ここ de シネマ〉開催活動などで取り組んできましたが、そこで得た経験や知見を広く共有してまちづくりに生かし、よりここでずっと暮らしたいと思えるまちづくりへと誘うものです。

森 多可示さんは、昨年１２月１０日開催された〈さがみはら１００人カイギ・ファイナル〉においてオーラス・スピーカーとして登壇。市民の自由と幸福について講演されました。今般、事業スタートにあたり、行政のなかで永らく活躍されてきた森さんをお招きし、社会参画への市民のあり方について語っていただきました。インタビューは 2024.2.29 実施。以下、森さんにいただいたお話をまとめさせていただき、読者のみなさまと共有させていただきます。

ひとりひとりのエネルギーが社会のエネルギーを生む

協働事業提案制度は長く運営されていますが、行政の補完や代替というところが中心になってしまい、市民提案が行政サービスの守備範囲になるかどうかという制約に縛られている懸念を抱いています。市民の側から、行政ではできない部分を自分たちの活動を通じて進めたいと言うと、「協働」の趣旨に合わないという事態となることが起きてしまう。「協働」という言葉が何を目指しているかを問えば、本来、行政と市民が互いにできない部分を補い合って、新しい行政、公共の価値観を創りあげるものだと思うのです。それがパートナーシップでもあるし、仕組みとしての市民参画のあり方だと思います。パートナーとしての市民の繋がりのなかで目指す新しい価値をどうつくりあげていくかが課題であり、そう考え方を切り替えていかないと限界が来てしまうというのが正直な思いです。どこの自治体でも、「協働」ではなく「共創」としての取り組みが始まっています。民主主義とは何かという根っこのところから考えて、市民とともにまちづくりに取り組み始めているのです。

市民と出会う方法はいくらもある

今までのやり方で行くと既存の団体の代表の方に入ってもらえば、市民の意見が聞けると思ってしまっている。もう少しフリーに市民誰でもひとりひとりが参加できる工夫が必要だと思います。例えば、地域・社会課題を解決する上で一緒にやっていきたいけどどうですか？と無作為に市民に声かけると、結構みなさん意見をお持ちです。何となく課題は承知しているけれどどう声を上げていけばいいかわからない。そのうちには何かしても変わるわけでないという無力感や誰かに任せておけばいいと委ねてしまう。自分たちが変われば何かが変わるという実感が持てなくなってしまっているのです。

変動性、不確実性、複雑で曖昧なVUCA※の時代と言われていますが、その一方、新自由主義的な考え方のなかで自己責任の強調だったり、あまり細かいことは言わないで大同につきなさいみたいな同調圧力がかかってきたりする。そこで出てくるのが、行政の守備範囲をできるだけ小さくしていこうという流れで、その結果、提示される選択肢がどんどん少なくなって、無力感ばかりが募ります。しかし、実は、考えていくと選択肢は無数にあって、当座の選択の先にまた次の選択肢が出てくる。だとすれば、単に何か考えつく範囲の協働というよりも、むしろ常にみんなで創りあげていこうするチャンネルをどれだけ広く設定していけるかというところがこれからの自治のあり方として問われてくる。この先どうすればいいかみんなで考えていけばいい。選択肢の協議を恒常的に創りあげていくことでこれからの自治が生まれる。全体をどうコーディネイトしていくかが行政側に問われている。

熟議が必要 早急に答えを求めなくていい

UDは、基本は他者理解のための哲学としての側面を持っているものだと考えています。いろいろな違いを抱えている人たちが、こうすれば乗り越えられるという共通理解を社会でどう作っていくかがUDだと。切り口を少しずつ切り分けながら、日ごろからいろいろな人たちがいろいろな話ができる雰囲気づくりをしておくことです。みんながどんな意見を持っているかについて、みんなが安心して話ができる。それが他者理解の繋がりになるのだと思います。

ネガティブ・ケイパビリティ※と言いますか、正解はひとつではありません。正しさは人によって変わります。ひとつの正解を見出すことがともに創ることの大前提ではないという点を押さえておかないと、納得を置き去りにした違和感を残します。蒸し返してもいい。謎が大きいほど立ち止まる力が大切。自分たちの世代で答えが出せないのなら、次の世代に引き継いでもいい。民主主義は時間と手間がかかります。

オーナーシップでまちにのぞむ

そして、公共財に対してオーナーシップでのぞむことが大切です。互いに快適さをどう確保できるのか。何をどう使うかということについては何通りもの方法があります。相模原には１万数千人の海外に由来のある方がいるだけでなく、宗教、生活、収入、性自認など本当に多様になってます。誰にとっても自由で快適なまちをオーナーシップをもってみんなが参加できる形で考えて初めて自助・共助・公助の話になるのだと思います。それが自分たちの生きやすさひいては自由を守ることにつながるのだと考えます。

【ことば解説】
※VUCA（ブーカ）の時代
「Volatility（変動性）」「Uncertainty（不確実性）」「Complexity（複雑性）」「Ambiguity（曖昧性）」の頭文字を取ったもので、物事の不確実性が高く、将来の予測が困難な状態を指す造語。
※ネガティブ・ケイパビリティ Negative capability
ジョン・キーツ（英・詩人）が提唱した言葉で、不確実なものや未解決なものを受容する能力。 悩める現代人に最も 必要なのは「共感する」ことであり、共感の熟成によって,答えの出ない事態に耐える力が生まれるとする。

み〜つけタウン

NPO メディア・アクセス・サポートセンター

MASC

UDでダイバーシティとインクルーシブを実現しよう

■わたしたちが開催する〈ここ de シネマ〉もこの4月で第22回を迎えます。2015年1月プレ企画として取り組んだ第0回『原発と日本』から視覚障がい者のための音声ガイドを付けて上映会を開催し、遅れて2015年8月の第1回から聴覚障がい者のための字幕つき上映を実現。開催挨拶の手話通訳を2017年2月第6回から行い、2017年11月の第8回から案内チラシに音声コードのUni-Voice を導入。2019年8月の第13回から UD トークによる挨拶とトークのオンタイム字幕表示をするようになりました。振り返れば、失敗も数々ありました。それでも「このまちで このまちのひとと ともに」の思いで上映会開催が続けられたのは、何よりも多くのみなさんの応援があってのことです。

■そして、課題は、ごく自然に「バリアフリー」から「ユニバーサルデザイン＝UD」へとステップアップしました。今号の1ページで森多可示さんは「UDは他者理解のための哲学」と語られています。「哲学」の域に達しているかどうかはわかりませんが、確かに、何かに取り組もうとするときの姿勢は変化しました。これまでのバリアフリーの成果を大切にしつつ、視野をUDへと拡げていきたいと考えています。

■そんな思いで、本紙、2015年8月に発行した第10号でお訪ねした特定非営利活動法人メディア・アクセス・サポートセンター（略称MASC）の事務局長・川野浩二さんを再訪しました。2018年6月の「障がい者による文化芸術活動の推進に関する法律」（略称：障がい者文化芸術活動推進法）の施行。2021年6月に行われた「障害者差別解消法改正」にともない、これまで行政にのみ求められていた「合理的配慮の提供」が2024年4月から、全ての市民・事業者にも義務化されること。変わり始めている社会の前線で、課題のひとつひとつに向き合う川野さんを大変頼もしく思い、ご縁をもって連なることができた幸運を改めて感じ、UD 普及・啓もう活動への意欲を高めた次第です。

▲右が MASC 事務局長 川野浩二さん

これは現在の相模原市 HP で見る市長会見映像。手話通訳あり。映像の下に長々と文字起こししした会見内容が付いています。コレ、読むのた〜いへん！

みんなが手話がわかるといいなと思う。
だれもが手話がわかるわけではない。
だから必要なんだ 字幕化。

拡がるUDトーク活用術

〈ここ de シネマ〉の企画トークでUDトークによるオンタイムの字幕表示を行うことが標準になっております。この頃では、公民館の公開講座でも表示させていただいています。

UD トークの活用が手軽になっているのは、なんといっても、QR コードで簡単にネットワークが組めることでしょう。おかげで、その場にいなくてもそれぞれの居場所でいっしょに文字修正ができますし、その字幕を各自のスマホ端末で確認できます。おまけにログが残るので、文書にして紙媒体に残すこともできます。

MASCさんでは、都知事会見を即座に字幕化し、配信しています。なにしろ、wi-fi 環境さえあれば、その場にいる必要はありません。なので、遠く長崎県知事会見についても字幕化をされているのだそうです。また、修正オペレーターの作業も、ほかの人の作業を肩越しに見て習得できることもあり、現在、地方自治体の首長会見に次々と UD トークが導入されています。相模原市でも昨年度から市長会見に手話通訳がなされるようになりましたが、手話が理解できる人ばかりではないことを考えると、字幕化がのぞまれます。

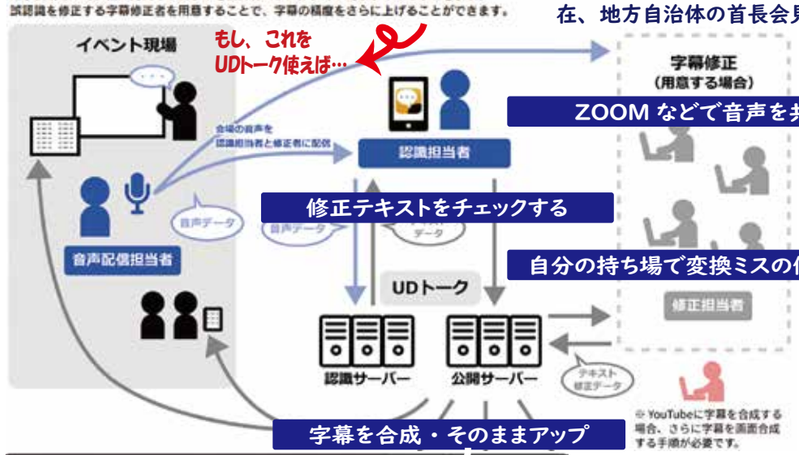
MASC さんでは、首長会見だけでなく、学会やシンポジウムなどの活用依頼が週１回位いの頻度であるそうです。

MASC さんは、業務については各々事業化してもらえばいいという考えで、メインはやはり映像のバリアフリー化。音声ガイドを作るﾃﾞｨｽｸﾗｲﾊﾞｰの地位と著作隣接権などの権利確保のためのレールづくりにも意欲的です。

字幕を見るメガネ開発にも興味津々ですが、今後も先達として助言を切にお願いしたいと思った次第です。

●MASC では、字幕・音声ガイドの普及、制作者養成講座も開催しています。詳しくは、http://npo-masc.org/ にて。

UDトークはネットワークを組めるので、話者名を記した会話ログを残せます。そのまま会議やミーティングのやり取りを記録したり、チャットGPTを使って要約させれば、そのまま議事録をつくれます。



こんなふうに字幕化
修正したところが黄色の文字になってます。

ここずっとは このまちのひとと ともに THEATRE for ALL に参加しました

市民が自分たちの手で字幕をつくり音声ガイドを仕上げることの意味

(C)2024「52 ヘルツのクジラたち」製作委員会

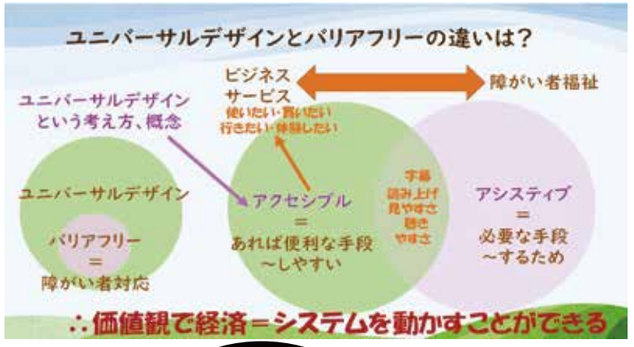
川野さんから教えていただいた新情報。音声ガイドが AI の進化で合成音声によるナレーションになりました。合成音声ガイドが付く最新の映画が右写真の作品『52ヘルツのクジラたち』です。この進化でもっともっと音声ガイド制作が拡がること請け合いです。劇場で体験オススメ！

字幕も音声ガイドも映像作品をいろいろな意味で観る能力に支えられています。それもひとりよがりではなく、共感というコミュニケーションによって。字幕・音声ガイドづくりは、鑑賞する側からの表現へのアプローチ。市民が自力で、字幕・音声ガイドづくりに向き合うことは、市民の主体をきたえ、より主体的な文化の担い手として育むことになると考えています。

私たちはしばしば「障がい」とひと括りにしてしまいがちですが、障がいのあり方はひとりひとり違います。その人の暮らし方によっても。だから、「だれにでも」と視点を変える。すると、それは自分の生きやすさに繋がりました。

見えない 見えにくい人
約164万人
日本眼科医会の 2009 年データより

聞こえない 聞こえにくい人
約1400万人
日本補聴器工業会の2018年データより



カタカナばっかりで意味がわからない!?

新しい言葉は新しい価値観を表します。日本語では表現できないカタカナには社会を変革する希望がひそんでいると感じています。

バリアフリーとユニバーサルデザインってどう違う？

下の図は、市民協働事業提案の際、説明のために用意したスライドです。福祉から社会戦略へ、と考えてはいかがでしょうか。

ダイバーシティとインクルーシブ???

UDはダイバーシティ（多様性）とインクルーシブ（包括性）を実現するための方法です。だれもがあるがままでいられるように。

製作：一般社団法人 EPAD
バリアフリー企画制作：THEATRE for ALL（株式会社 precog）
バリアフリー日本語字幕：NPO法人ここずっと
音声ガイド：NPO法人ここずっと
文化庁文化芸術振興費補助金（統括団体による文化芸術需要回復・地域活性化事業（アートキャラバン2））｜独立行政法人日本芸術文化振興会

グスコーブドリの伝記

演出：宮城聰
作：宮沢賢治
脚本：山崎ナオコーラ
ドラマトゥルク：西川泰功
音楽：棚川寛子
主催：SPAC
（静岡県舞台芸術センター）
平成２６年作品

▲2024.1.15 ﾕﾆｺﾑﾌﾟﾗｻﾞAVﾙｰﾑにてガイド収録
手前はﾃﾞｨｽｸﾗｲﾊﾞｰの田嶋さん 奥はﾅﾚｰﾀｰの西本さん

■ 音声ガイド版
https://youtu.be/-aB9LT28aes
■ バリアフリー字幕版
https://youtu.be/dhogHzywh24

正月休み明けから、わたしたちは『グスコーブドリの伝記』舞台映像のバリアフリー化に取組みました。宮沢賢治・原作の作品を宮城聰さんの演出手法で表現した舞台はひたすら澄み切って賢治の思想を深く探ります。そんな表現を字幕やガイドに映し取ることができるのか…。いつもながら途方に暮れる思いでチャレンジしました。字幕・音声ガイドに正解は無い、との思いで自らを励まし、障がい当事者のモニターのみなさんの「わかる・わからない・わかりにくい」という意見を助けに仕上げました。左記URLや題名で検索して、是非、ご鑑賞ください。

▲2024.1.9 南地域福祉交流ラウンジにて字幕モニター会を開催
仮に字幕を付けた映像を観て、手話をまじえて意見交換しました。

寄稿

足を運べる場所だからこそ 文化、コミュニティと人の出会いを醸成する

署名リンク: https://chng.it/YPMKKp7nNC
連絡先: 373.Shimin.Hall@gmail.com

「# 南市民ホールをなくさないで」の会の活動をご支援いただきありがとうございます。 代表 坂田菜々

昨年9月には相模原市議会に手紙を届けた。「#南市民ホールをなくさないで」の会より 写真提供

私はこれまで南市民ホールを利用してきた相模原市民の一人です。幼い時から南市民ホールでお芝居を観て育ち、ピアノの発表会では舞台に立つ緊張感や達成感を味わいました。今は地域の子どもたちや仲間と生の舞台に触れて考え合い、また親子三代で演劇鑑賞を楽しみ、集う場になっています。

気軽に足を運べてちょうどいい

私にとって、音楽や演劇などの文化芸術に触れることは、生きる源です。そして、そこで育まれるコミュニティ、人との出会いは、かけがえのないものです。

南市民ホールが廃止されたら、私たち市民が主体的に使える文化の活動拠点がなくなってしまいます。市は、代替施設としてグリーンホールの多目的ホールや中央区の施設等をあげていますが、それらは南市民ホールの代替にはなりません。文化やコミュニティの醸成には、気軽に足を運べる場所に、市民が利用しやすい規模感かつ設備の整ったホールがあることが重要です。南市民ホールは南区にとって唯一無二の大切な施設なのです。

議会傍聴も市議と懇談も初めて

市長との意見交換会では、南市民ホールが中学演劇にとっても重要な役割を果たしていることを知りました。そこで、若者や舞台に携わる人など、より多くの人と「南市民ホールをなくさないで」の思いを共有し運動をひろげていくために、「#南市民ホールをなくさないで」の会を立ち上げ、オンライン署名と SNS アカウントでの発信をおこなってきました。オンライン署名は 500 人以上の方から賛同をいただきました。SNS では、市民一人ひとりの「なくさないで」の思いを動画で発信。また、なぜ南市民ホールが廃止されようとしているのかを動画で説明しています。

9月、12月議会で南市民ホールの廃止に関する議案が議論されるということで、市議のみなさんに私たちの活動内容について手紙を送り、コンタクトがとれた方には懇談の機会をとっていただきました。議会傍聴や市議との懇談は初めてのことで緊張しましたが、私たちの思いを真摯に受け止め、「廃止反対」の立場で討論してくださる市議の方々の存在は心強かったです。12月の市民環境経済委員会では、南市民ホールについて2時間近く議論され、存続の方向に傾くかと期待しましたが、賛成多数で廃止が決定されてしまいました。

廃止と決まったけれど…

市民が文化活動を楽しみ、他者と交流し、いきいきと生きていくために、南市民ホールはなくてはならない存在です。「廃止」と決定されましたが、2026年3月まで南市民ホールは在ります。私たちに何ができるのか考え、諦めず行動していきたいです。

もうひとつの わたしたちに初めてをくれた南市民ホール

2009年9月　初めての音声ガイドをつくって配信したホール
2023年9月　初めて手話動画付き上映会を実現したホール
2023年9月　初めてナビレンス案内を掲示してくれたホール

たとえ形がなくなったとしても、そこで何がどのように起きたのかを記憶することはとても大切と考えています。記憶はまちを支えるから。私たちは、このホールで初めて視覚障がい者のための音声ガイドを提供しました。、ミニFM発信機を持込み、音響調整室に入れてもらい、ライブでガイドをナレーションしました。FM電波の受信ができたときに劇場の方と交わした熱い握手を忘れません。市民とともに在る、地域のホールだからこそできたのだと思います。

2009年9月4日に上映されたのは、小林茂監督のドキュメンタリー映画『チョコラ!』。トークにいらした監督にとっても音声ガイドを聞くのは初体験で、早速、気に入ってくれてDVD化されるとき、私たちのつくった音声ガイドがそのまま採用されました。私たちをUDへと拓いてくれたホールなのです。

クリップ・ボード

■NPO法人ここずっとは―

上映会の出前します！
10～30人ぐらい
会場はご相談にて
有料上映会のとき
参加費用
ひとり1000円
無料上映会のとき
別途規定あり
プロジェクター貸出ます
申込は ここずっとへ

光が聴こえるように 音を見えるように

こころの通訳者たち What a Wonderful World
の巡回上映会にまだまだ取組んでいます。
作品中に登場する月餅料理教室も鋭意計画中。
開催および参加希望の方はお問合せください。

▲講師となってくださる難波さんのキッチンでひと足お先に月餅づくりを体験しました。

シンポジウムやイベントをＵＤにするお手伝いをします。

市民相談窓口を開いています。　**相談は☎042-851-5646へ。**
※電話番号が変更になっています。ご留意ください。

Information

ここ de シネマ第２２回は『NO 選挙、NO LIFE』

© ネツゲン

参加費1000円のところ
20歳以下　無料
4月19日（金）
昼の部　14：45～
トーク　17：00～
夜の部　18：30～
於・南市民ホール

●半券キャンペーン参加事業者募集中です!
●<ここ de シネマ>開催ボランティアも募集中!

『フリー情報紙 ここずたうん』 No.24
［発行日］2024年3月
ここずっと ［発行者］NPO法人 ここずっと
〒252-0303 相模大野9-6-18
ここずたうん編集室

ご意見、投稿、記者志望者は
ここずたうん編集室へ

【TEL】042-851-5646　【FAX】042-742-0447
【E-mail】info@cocozutto.jp

※ここずたうんはまちづくりを考える【NPO 法人ここずっと】が発行しています。